

高木復興大臣記者会見録

(平成27年10月10日(土) 16:02～16:11 於) 岩手復興局)

1. 発言要旨

休日にお疲れ様です。休日でありますけれども、一日も早く被災地を訪問したいという思いから、達増知事の御都合も何とかつけていただいたということでございまして、本日、達増知事に就任の御挨拶をさせていただき、そして達増知事から御要望等をお聞かせをいただいたところでございます。

私のほうからは、7日の初閣議において安倍改造内閣の基本方針が決定されて、その中の一番初めにやるのが、全大臣が復興大臣になった気持ちでいうんでしょうか、副大臣でというような言葉がありますけれども、まさに安倍改造内閣の一丁目一番地、最重要課題の一つが復興でございまして、その司令塔となるべく復興庁、そしてまた東ね役として私、復興大臣が務めるといようなことで、大変大きな責任を担っているといようなこともお話をさせていただいたところでございます。

また、やはり何をおきまして被災地の皆様方に寄り添うということが大切だということを申し上げ、今日に限らず、これから何度も何度も訪問をして、知事、あるいはまた首長の皆さん、被災地の皆さんからいろいろな話をお聞かせいただいて、復旧・復興に役立てたいという話をさせていただきました。

またあわせて、もう4年7カ月たつわけでございます。来年の3.11をもって5年ということになります。これまで集中復興期間、そして次なる5年、復興・創生期間というふうに言うておりますけれども、復興が進んでくれば、また新たな課題が発生するということかというふうに思っております。3.11までの半年弱、次のステージに向けて、一人でも多くの方が「よくここまで復興してきたな」と思ってもらえるように、実感してもらえるように、そして次の5年間で更に今度は復興から再生へというようなステージを迎える中であって、ちょうどその間にあるわけでございますので、そういった気持ちを持って頑張っていきたいといようなことでございます。

達増知事からは、次のようなことがお話がございました。

岩手県では、今なお2万4,000人の被災者が仮設住宅で生活をし、依然厳しい状況だが、まちづくりや住宅再建の事業はピークを迎えている。今後、被災者の生活支援やなりわいの再生がますます重要となるので、復興予算の確保に国の支援をお願いしたい。

また、ラグビーワールドカップ2019に向けた釜石スタジアムの整備に関し、復興庁が課題を検討する場を設けていただいたことに感謝をしたい。国、県、市、町が一体となって課題を克服できるよう、よろしくお願いしたいというお話がございました。

私のほうからは、総括的には達増知事からいただいた御要請、予算、あるいはまた人材、そしてまた生業(なりわい)、生活再建、そういったことに

ついて「しっかりと取り組んでいく」という話をさせていただき、あわせてラグビーワールドカップの件につきましても、「復興庁として努力していく」という話をさせていただきました。

繰り返しになりますけれども、いずれにしても、とにかく被災地と寄り添った形で被災地の意見も聞きながら取り組んでいただきたいということを再度申し上げて会談を終えたところでございます。

以上でございます。

2. 質疑応答

(問) まず、ワールドカップのスタジアムについて、具体的に先方から提案、若しくはそちらから御回答されたことというのはありますか。

(答) やはり釜石というのは昔からラグビーの町であるし、私も、その誘致をしたことについては大変意義がある、そしてまた、要するに復興がなった姿というものを世界に発信する非常にいい機会だというふうに知事もおっしゃっていましたし、私もそのとおりだというふうにお答えをしました。復興庁として、このスタジアムの建設を受けて努力をさせていただきたいという話をさせていただいたところでございます。

(問) 達増知事との懇談の中で、予算や人的な部分の話のほかに、市町村のまちづくりの中で、用地の集約について時間がかかるという課題を示されたというふうにお聞きしましたがけれども、そのあたり、どのような課題意識でどう対応されるんですか。

(答) きのも一部報道されておりましたけれども、しっかりとこれもやらなければならない課題だというふうに思っています。税制だとか、そういったところを通じて集約だとか、あるいは替え地というんでしょうか、交換というんでしょうか、そういったようなことも進むようにやっていかなければならないという話はさせていただいたところであります。

(問) 今、被災地では、住宅再建のほうがなかなか進まないとか、大分時間がかかっているという声が被災者の方を中心に聞かれることが多くなってきました。その住宅再建の加速化に向けた取組みというのも、今のところ復興庁としてどのようにお考えなんでしょうか。それに向けてどのようにお考えなんでしょうか。

(答) これまでの5年間、そしてこれからの5年間、いわゆる生活再建、あるいはまたなりわいという言葉が出てくるわけでもありますけれども、何をおきまして、やはり住まいというものは大変大切なものだというふうに思っておりますし、自民党の復興加速化本部、大島先生が本部長でありますけれども、そこでもまず住宅、住まいということを強く私にも言われておりますので、第2ステージのところに行くといえども、まだまだそういったところは不十分だと思っておりますので、そういった住まい、住宅についても、当然これからはしっかりと対応していくということは言うまでもないことだというふうに思っています。

(問) 今おっしゃったようなハードの整備に加えて、これからはやはりソフトの整備が非常に大事になってくると思います。実際被災地では、既に独居老人の方の孤独死が出たり、自宅を再建したはいいけれども、新しい雰囲気はまだまだなじみ切れないとか、雰囲気自体がまずできていないといった問題も、どんどんこれから出てくると思います。そういったソフトの対策づくりをどうやっていけますか。

(答) こういった避難が長期化にわたっておりますと、体もそうでありますけれども、とりわけ心の健康というものが非常に大きな問題だというふうに思っております。ですから、心身ともにいろいろなケアをする、見守り隊だとか、いろいろな手当を講じて、そうした仮設にいらっしゃる方たちも心身ともに元気に過ごしていただけるような対応というのは、これからはしっかりとやっていかなければならないというふうに思っています。

(問) 達増知事のほうから、復興の一つのシンボルとしてILCの建設についての応援についてもお話があったと思います。その辺、大臣の受けとめをお願いします。

(答) 私もまだ就任したばかりで、十分な勉強はしておりませんが、一つの岩手の復興のシンボルだと思いますし、これからまさに被災地の方に夢を持ってもらえる、そういったような計画かなというふうに思いますので、達増知事の御要請を受けて、復興庁としてもしっかりと取り組んでいきたいというふうに思います。

(以 上)